
ひゃく数えたら

山田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひやく数えたら

【Nコード】

N4755I

【作者名】

山田

【あらすじ】

高校3年生の陽治くんと、大学4年生のまゆこさん。付き合ってもうすぐ1年になる二人は、年の差も関係なく周りからも羨ましがられるような相性のいいカップルです。二人ともすでに進路が決まり、一緒にいる時間が増えました。嬉しいけど、陽治くんはまゆこさんの様子が可笑しいことに気付いています。不安だけど、大丈夫。陽治くんは信じています。まゆこさんのことが、好きだから。人生の岐路に立っている二人が選ぶ未来とは。年の差カップルの甘くて、ちょっぴり切ない恋のお話です。

おはようの時間

雨が降っていた。

しとしとという擬音を見事に表したような雨。

癖毛の彼は、起きた瞬間から不機嫌顔。薄目を開けて見ていた私は、やっぱり、いつも通りの反応に少しだけ頬を緩ませる。

本当はもう一時間も前から目を覚まして雨を眺めていた。けれど、彼が憂鬱になるのだろうと思うと、起こす気にならなかったのだ。それを知っている彼は、起こすと言うより構って欲しいというように私を揺すった。今日はサボろうと誘惑するために。

「まゆこさん、雨だよ」

「そうだね」

窓際に頭を向けたベッドからは、数え切れない雫の筋が見える。もう10月。さすがに素っ裸で寝るには肌寒い季節になった。特に、こんな雨の日は。

「陽治くん、着るものって」

「えー。もうちょっとうとうして居ようよ」

「甘ったれないの」

じゃれつく犬のような仕草で、私の肩口に鼻を擦りつけてくる。くすぐったくて身を擦ると、ぎゅうと腕を回された。

かき慣れた香水が香らない陽治君は、なぜか私のしらない男の子の匂いがする。

「まったく」

「へへ」

怒ったようなポーズをとると、フザケタ笑いを耳の後ろで漏らす。朝から、まるで『ラブラブなカップル』のようなやり取り。

急に気恥ずかしくなった私は、もう一度まったく、と呟いてから肩を強めに押した。

ごろん、と転がった陽治くんを乗り越えてベッドの下を見ると、紺色のスポーツジャージが脱ぎ捨てたままになっていた。大きすぎるジャージは、着る私を嫌がるように着心地の悪さを伝えてくる。

「コーヒー飲む？」

「うん」

最近砂糖無しで飲めるようになったと自慢してきたことを思い出しながら、だぶ付くジャージの袖を引っ張って指先を隠す。

キッチンに続くフローリングは裸足の足には冷たすぎる。スリッパをはかなかったことを後悔しつつ、爪先立ちでケトルを火にかけた。

「今日の講義なに入ってたっけな」

「3限だけでしょー」

「そっかー」

「そうだよー」

扉の向こうから、私の予定が聞こえてくる。就職先も決まった4年生の私は、ゼミと適当に取った講義だけ。卒論も前々から準備していたために、そんなに切羽詰った感情もわからない。

バイトをして、卒論のために大学に行って、陽治くんが居て。

私の居場所はこんなにたくさんある。

ーピーー

かちと火を止める音がすると思ったら、いつのまにか陽治くんが隣にいた。

20センチの身長差のせいで、私は見上げるようにしないと彼と顔を合わせることができない。

「お湯沸いてるよ」

「分ってる」

「ぼーっとしてた」

私の目を覗き込むように、屈んだ陽治くんの顔が近づく。

彼の二重瞼は、伏せると長い睫を覗かせる。

セクシーで、私の凄く好きな表情だ。

「疲れてるの」

「ううん、そうじゃないんだけど」

本当に？ と訝しげな眼差しを避けるために、触れる位の温度になったケトルの取っ手を握った。

「ほら、カップ取って？」

「はい」

後ろの小さな食器入れに入れてある色違いのカップが手渡される。洪めのレンジが陽治くん、薄い水色が私。普通のものより大きいのだから、私の手にはちょっと余るほど。

白い内側が隠れるようにさらさらとインスタントの粉を入れ、お湯を注ぐ。

湯気に紛れ込んだコーヒーの香りが、じわりじわりと広がっていく。

私は、キッチンと挽いた本物のコーヒーよりもインスタントの薄っぺらい味が好きだ。なぜか安心する。

「牛乳」

「ありがとう」

ミルクの粉はウチにない。陽治くんも私も、あの匂いが苦手なのだ。

お湯を沸かしている間、コップに移しておいた牛乳を陽治くんは零さないように慎重にマグに移す。

真剣になると薄く開く癖のある唇を、コーヒーに口をつけながらさり気無く見つめる。

「…あ、零した」

「だって、まゆこさんが見つめるからー！」

「人のせいにしないの」

ばれていたのを誤魔化すように眉を寄せて、ティッシュを一枚渡す。

「平気だよ」

ぺろりと舌を出して、コップと自分の手の甲を舐める。

いやらしくみえても可笑しくない動作のはずなのに、なぜかみえない。そんな陽治くんの清廉さを、大抵の場合私は好ましく思う。

「陽治くんは？」

「え？」

「部活あるの」

「あー…、る？」

「なにそれ」
「忘れちゃった」

はははと困ったように笑って、思い出そうと唸る。

人の予定を確り覚えているのに、自分の予定があやふやなんて。すぐに自力を諦めた彼は、ポケットに入っていた携帯を開く。かちりという音と共に、電気をつけていない薄暗いキッチンに青白い光。

携帯の灯りは以外と明るい。眩しく感じて、コーヒーに目を落とした。

ブラックのコーヒーの上に、褐色の泡がうるうるして、カップの淵に落ち着いた。

「ある」

「そつか、何時？」

「5時に終わるから、6時には帰る」

「ご飯、どうする？」

「ここで食べる」

無音で頷くと、隣でおなじくシンクを向いていた陽治くんが私の正面に回る。

私とシンクの間に挟まり、半分になったコーヒーを脇に置いた。

「まゆこさん」

「なに」

「なんでもなーい」

甘えた声を出す陽治くんの胸をぽんぽんと叩く。

「ぎゅってしていい？」

「どうぞ」

陽治くんは嬉しそうにカップを取り上げて、オレンジ色の横に置いた。

私の手首を長い腕が掴んで、引っ張られる。

「まゆこさん、髪の毛伸びたね」

「うん」

さつき叩いた場所に額を当てて、髪の毛を梳く手を許す。

陽治くんと付き合いだした頃は、肩よりちょっと長いくらいだったのが、今では胸までの長さになった。

無言が続いて、髪を梳く一定の速さが眠気を誘う。ぼんやりとした気分負けそうになって、ふと我に返る。

「やだ、今何時？」

「10時ちょっとすぎ」

「そろそろ支度しないと」

「なんだー、作戦失敗」

「何が？」

「このまま眠くなっちゃうかと思ったのに」

「はは、残念でした」

尖った口をつまんで、潔く背を向けた。

洋服を用意しながら、シャワー浴びて化粧してと外出するまでを頭の中でざっと計算する。

キッチンにあるぬくもりを名残惜しいと感じてしまわない方法。

恋に疎い私でも十分に知っているのだ。

おはようの時間 2

「まゆこさーん」

「なにー？」

「髪の毛乾かすよー」

着替えて歯を磨いていると、陽治くんがソファに座ってタオルを持った手を広げている。にやりと口元だけで笑う陽治くん、苦笑い。

そうだった。陽治くんも私と同じくらいには、私を行かせない方法を編み出しているのだ。

「…う」

「いいじゃん、乾かすだけなんだから」

「分った分った。ちょっと待って」

口の中をすすいで、心の中で言い訳をしながら急ぎ目にソファへ舞い戻る。

浅く腰を落とすと陽治くんが背後に立った。

タオルドライをして、弱くしたドライヤーを遠くから当てる。

大きな掌と長い指が、髪の毛の水分を奪っていく行為が私は大好きだった。

「今日は一緒にお風呂はいるう？」

「髪？」

「うん、シャンプーしたい」

髪のため、というのもあるけど、こうして会話をするためでもあるのだろ。弱いドライヤーの風は陽治くんと私の声を控えめに遮

る。

一通り乾くと、ヘッドオイルの塗られた指が地肌をマッサージするように動く。

「…きもちいい」

「まゆこさん、好きだよね」

「うん。陽治くんの指がマッサージするの、凄く気持ちいい」

「まゆこさん、いやらしい」

「は？…ばかねえ」

「バカじゃないよ！」

「はいはい」

笑いながら目だけで見上げる。

むと頬を膨らます。拗ねてますのポーズ。

小さい子しか許されないよ、と思いながらもそんな表情を素直に見せる陽治くんが可愛らしいと目を細めてしまう。

「はい、終わり」

「ありがとうございます」

「どういたしまして」

につこり、目がなくなるくらいの笑顔になった彼の頭をいいこ、と撫でる。

気持ちよさそうに手に擦り寄ってくる陽治くんを見てみると、暖かい気持ちになる。でも同時に、言いようのない不安が過ぎる。最近になって気付いたこと。昔からだったのかは、よく分からない。

「行きたくなくなっちゃった？」

「ぜんぜん」

手の下で、伺ってくる陽治くんに意地悪な笑顔を返して思う。
分っていることは。

それは私の問題で、向き合うことが怖い問題ということ。

「陽治くんのお陰で、行きたくない気持ちがなくなった」

「えー」

あまりに情けない声がおかしくて声を立てて笑うと、陽治くんも笑い出す。

本当は、このまま陽治くんと居たかった。

結局、ほとんど時間通りに出発できた。

「ごそごそと着替えている陽治くんに玄関から声だけで挨拶を済ます。施錠は後から出る陽治くんに任せて。私の部屋の鍵は、ずいぶん前に彼に渡してあるのだ。」

玄関ホールで管理人さんに会釈して、ビニール傘を開く。買ったばかりの匂いのキツイビニールが雨を遮断した。

マンションの前の一通の道路を渡りきってから、自分の部屋を振り向く。

いつも通りにベランダでいつてらっしゃいをしてくれる陽治くん。ホームドラマでも見なくなったその光景は、私たちが大切にしている習慣。

「いつてきます」

彼には聞こえない声で呟いて、ビニールの下から手を振った。
学校までは、ゆっくり歩いてもだいたい20分あれば余裕でいける。

お昼ごはんはどうしよう。腕にはめた時計を確認すると、まだコンビニに寄るくらいの猶予は残されていた。

一瞬だけ考えて、でもそのまま駅に向かうことにした。

今日は講義だから、友人がいるという補償はない。一人で食べるのだったら、いつそ家に帰って食べてもいい。

取り留めのないことを考えながら、のんびりした速度で雨の道を歩く。

橙色の小さな花を落としかった金木犀。残っている濃い緑の硬い葉を横目に路地を曲がると、急に人の往来が激しくなる。

こんな時間だからか、制服を着た学生やスーツ姿の人たちは少ない。代わりに買い物帰りの主婦やキャリアバッグを引いたお婆ちゃんとすれ違う。

「まゆこ？」

「あ、おはよ」

一本の傘を2人で差して歩いていく老夫婦の後ろ姿を見送っていると、真後ろから呼ぶ声。

「浩介も学校だったんだ」

「橘先生に呼ばれて」

「卒論で？」

「たぶん」

浩介は細い肩を寒そうに縮めながら、小さな折り畳み傘の下に収まっている。学科が違うから、会おうと思わなければ会わない。3ヶ月ぶりくらいに会う。顔付きがやつれて見えた。

「さみーな」

「そうだね。去年の今頃はもうちょっと暖かった」

「だなー」

私の傘に、浩介の雫が垂れている。

ビニール傘の上に差されている折り畳み傘。

私は雨からずいぶん遠いところに居るような気分になる。

「会ったの、久しぶりだね」

「そうだな。…就職先、結局あそこにしたんだ」

「うん」

大学院に進む浩介は、就職活動はまったくせずに院試を受けた。

まだ3年だったときに、焦る気持ちはないのかと聞いたら、あるわけないだろ。と笑っていたのを思い出す。

「浩介は」

「俺も」

「そっか」

大学通りに差し掛かると、同世代の学生たちで道がいつぱいになる。

ざわざわともがやがやとも聞こえるたくさんの喋り声に、私たちの小さな会話は簡単に押しつぶされてしまった。

途切れた会話は再び始まることがない。

浩介も私も、それを気にはしない。しょっちゅうあることだから。2人で居ても、無理に会話を続けようとは思わない。外的要因がなくっても二人の間に沈黙が訪れることはままにあった。

傍から見ると、たまたま横を歩いている人たちみたいだ、と友人に言われたことがある。私は言いて妙だと返した。

言葉にするなら、知り合い以上友達以下の関係。

「教授棟？」

「ああ」

「私は一号館だから」

ばいばい、と別れの言葉もなく、人の波に乗って別の方向に進む。教授棟と一号館は正門から入ると、真逆に位置している。

別れてすぐに、腕を見て時計を確認する。

人が多いので、授業が終わった時間だと思ったが、予想以上に開始時刻が近づいている。3階の教室へ向かうのにエレベーターをちらりと確認して、すぐに階段を目指した。

息切れを整えながら教室に入ると、すでに先生が居てプリントの用意をしている。いつも遅めの先生に遅れをとったことが、何となく悔しい。

扉を閉めた音で私の入室に気付いた先生に、早々に名前を呼ばれる。

当たり前のように差し出される分厚いプリントの束。

「はい、森さん」

「はいじゃないでしょ、先生」

「ほらー。授業始まっちゃう！早く配って！」

愛想の良い笑顔とフランクなノリが人気の彼女は、2年からずっと私の指導教授。研究対象が合致しているせいか、他の同期よりも仲がよいと自覚している。

「話があるの。終わったら研究室に来てちょうだい」

しょうがなく伸ばした私の手の平にプリントを乗せながら、先生は声を落とした。

好きな先生の、人を見透かすような目。唯一、彼女の苦手に思う

部分。

「はい」

コピーしたてのプリントが掌を暖めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4755i/>

ひやく数えたら

2010年11月7日07時36分発行